

四国・水こぼれ話

Water Information Saloon Shikoku

談話室 Vol.98

瓜切って 貝切った

高知県 三原村長
くぼ ともあき
久保 知章



三原村は、高知県の南西部に位置し、四万十市、宿毛市、土佐清水市に囲まれた 85 km²の中山間の過疎の村で、この地域で村としては唯一、絶滅危惧種の如く頑張っています。

人口も現在では、1900 人を割り込み、土佐清水市との境を成す 886m の今ノ山を主峰として、周囲は 3~400m の山々に囲まれて盆地を形成し、その盆地の中に小高い小さな山々があり、三原平野は山の海と歌われたりもした。

今ノ山を始めとするその山々から湧き出る命の水は清流を成し、土佐清水市下の加江の里へと流れ下る。

その昔、その昔、三原郷と呼ばれた三原米は特に味がよく、早くから稲作が盛んで、耕地整理は進み、今でも三原米の評判は上々である。農道も隅々まで舗装整備され、この穏やかな里の全村公園化を私は望んでいます。人々の日頃の営みが、四季折々の美しい景観を見せてくれる。桃源郷の夢を見ている。

三原郷では山々から湧きこぼれる清らかな水と、美味しいお米に恵まれて、秘境として存在し、官は怒っても、神は許してくれると、古くから命を育む酒、どぶろく造りが秘かに盛んに行われていたという。

そんな三原郷のむかし、昔のお話。三原の若衆の一人八郎こと、はち公は、自慢のどぶろく一本ひょいと背に、久し振りで長年の仲良しである下の加江の勝こと、まあ公に逢いたく清流沿いを急いでいた。不思議なことに、まあ公も又、天気もよく波も穏やかな日和に思いたち、磯で採れた貝

をこじゃんとぶら下げて、足取りも軽く、はち公に逢いたさに山道を急いでいた。

川沿いの道は一本じゃけん二人は、たちまち出会った。久し振りで逢えた二人は抱き合せて喜び見晴らしのよい木陰で山の畑でとれた瓜と、浜でとれた貝を着にどぶろくで大いに盛り上がったのは言うまでもない。

たろばあ喋くって、さてさて、そろそろ帰ろうかと腰を上げると、はち公がお父に黙ってこっそりもって来た、立派な腰のものを、当たり前のことのように、まあ公が腰へ差している。はち公は怒って、『なんぶ言うたち俺の大切なものをおまえは取り上げるのか』と、どぶろくの勢いもあって、まあ公に喰ってかかった。ところが、まあ公は落ちついたもの。『これは俺のものだ』という。二人はワンワン、ガヤガヤ。正に取っ組み合いになろうとした。

そのとき、『ワン等あ辞めんか』と大声で仲に割って入ったのは、三原郷の長老だった。訳を聴いて長老はにっこり笑い言い放った。『三原のはち公は瓜を切った。下の加江のまあ公は貝を切った。勝負は決まっておる。売り切って、買切ったら、まあ公のものだ。』

はち公はへなへたと座り込んだが、その後も二人は仲良く、共に白髪の生えるまで、仲良く長生きしたそう。

三原村では近年、特区の許可を得て、今再び、どぶろく造りが盛んになろうとしています。どうか一度なりと、三原郷のどぶろくをお楽しみ下さい。ほろ酔い散策は格別です。



三原郷のどぶろく